



令和2年度 宿利原小学校だより

宿っ子 10月②号



学校のホームページは上のQRコードからお入りください



読書の秋 ~社会のICT化が進む今だからこそ~

校長 有留 盛昭

朝晩が、めっきり寒くなってきました。長袖のシャツを身に付け、そろそろ灯油も準備しようかと考えているこの頃です。ストーブやヒーターを出す前に、火鉢を使ってみようと思い、木炭に火をつけて、五徳にやかんを乗せて、その横で本を開いてみます。なんとも穏やかな時間が流れます。他のことをそっちのけにして、本の世界に入り込んでみると、体も心もリラックスできます。ほんのりと部屋に広がる木炭の香りは、子供の頃よく行っていた祖父宅の掘りごたつが温かく心地よかったという記憶を呼び起こしてくれます。

香りにより昔の記憶が呼び起こされることをフランスの作家の名前に由来する「プルースト効果」というそうです。脳の発達と読書の関係について書かれた本で「プルーストとイカ」～読書は脳をどのように変えるのか?～(著:メアリアン・ウルフ)というものがあります。私自身の読後の感想は、「内容が難しく、今のぼくには全てを理解できません」でした。でも、誰かに伝えたいような読書の効果について書かれていたのでここで少しだけ紹介します。

- 読み聞かせは、その行為自体が愛されているという実感と結びついている。
- 物語は、他人を理解する能力を養う。自分で経験したことのない新しい感情を体験するきっかけになる。
- 書物にはそれぞれに独自の表現があり、話し言葉では出会うことのできない多数の表現に出会い、感じることができる。(感性を養う)
- 読字による理解力の高まりや、わずかな情報から多様なことを想像したり推論したりする力を養う。
- 人類における脳の発達(進化)が書字や読字とともに進んだように、子供の脳は読書環境を整えることによって、多くの知識を習得できるようになる。
- 電子書籍などデジタル化された情報を読むことは、これまでと同様の読書の効果が期待できるのか。また、それを上回る効果があるのか。何かを失ってしまうのか。



書かれている言葉が難しすぎて、かみ砕いて説明できない自分の力不足を情けなく思います。本を読むことで自ら身に付けていく能力は、周囲から教わって身に付ける能力とは違う独自性や豊かさが含まれています。

これから始まる教育現場での一人一端末時代「GIGA スクール構想」の中で、活字離れやメディア依存などの懸念を耳にすることがあります。アニメーションや YOUTUBE など映像と音声により獲得する知識等は、読書から得る知識や創造性・想像力・リラックス効果、共感する力などには遠く及びません。情報処理能力が開発途上である子供たちを守る上で、私たち大人が真剣に考えていけないといけないところだと思います。

これからの新しい社会では、多くの情報を処理する為の新たな技術を子供たちに身に付けさせなければなりません。その一方で大切なものを失わせないために、自ら本に手を伸ばす子供を育てることは、私たち大人に課せられた大切な役目だと思います。